



## 日本山岳会に入会して

### 徳仁親王

日本山岳会という名前を知ったのはいつ頃だったか、はっきりとは記憶していない。しかし、今にして思えば、私は、小学生の頃から書籍を通して、人の話を通して、あるいは、日本山岳会の方々とお会いすることなどを通して、知らず知らずのうちに日本で最古の、そして最大規模の日本山岳会という存在に近づいていったような気がする。

5歳の時に軽井沢の離山に登ったのを皮切りに、私は山登りに関心を持つようになった。今、私の手元に少し古びた山溪カラーガイド『日本の山々』（山と溪谷社）がある。日本の山々の美しいカラー写真とそれぞれの山についての興味あふれる説明文は小学校高学年の私の山への関心をかきたてるものであった。その当時は何気なく目にしていた文章も、日本山岳会の会長も務めた武田久吉・三田幸夫・西堀栄三郎氏ら日本の登山の発展に多大な貢献をされた方々によるものと後で知った。

また、同じ頃、両親の書棚にあった、『世界文化地理大系』（平凡社）を両親とよく眺めた記憶がある。ことに、8巻の「中央アジア」にはヒマラヤやカラコルムの山々の写真が掲載されており、世界には年中雪に覆われたこんなに高い山があるのかという驚きを覚えたものであった。K2・カンチェンジュンガといった山名は確実にこの本を通して覚えたものであるし、日本隊によるマナスル登頂について知ったのもこの時期であった。小学校高学年のときに読んだ槇有恒氏の『マナスル登頂物語』（あかね書房）にはとても感動した記憶がある。秩父宮殿下の登山の話も秩父宮妃殿下から、あるいは両親から、登山に同行した槇、三田、松方三郎氏の話とともに聞き、山登りに関してすごい大叔父がいたことも知った。また、この頃から加藤泰安、梅棹忠夫、川喜田二郎氏などから登山や探検についての様々な話をうかがう機会に恵まれたことも幸いであっ

た。

話は若干前後するが、私をはじめて上高地を訪れたのは乗鞍岳に登山をした1967年のことであった。河童橋や明神池から穂高連峰を眺め、その美しさと陰しさに驚いたことは確かであるが、近く穂高に登りたいという思いを抱いたようには記憶していない。しかし、この時の記憶が、その後の私に、日本の山々の登山史についての好奇心を呼び覚ましたように思う。

ヒマラヤをはじめて眺めたのは1987年にネパールを訪れたおりであった。ポカラに到着した日の夕刻、茜色に染まったマチャプチャレが雲の間から姿を現した。

その頂は、私の想像を遙かに超えた高さに位置していた。フィッシュテール・ロッジに宿泊した翌朝、ペア湖の向こうには美しいヒマラヤの峰々があった。マチャプチャレ、アンナプルナ、ダウラギリ等それまでは写真や映像でのみ接していた山々を実際に眺め、神々しさに心を打たれるとともに、「神々の座」を目にすることの出来た喜びをかみしめた。

ポカラからの帰路は天候も良く、飛行機の機内から更に多くのヒマラヤの山々が眺められた。ヒマールチュリ、マナスル、P29などといったいずれも日本隊が初登頂した山々も間近に眺められた。カトマンズも近づいた頃、遙か彼方にひときわ大きくチョモランマ（エヴェレスト）が眺められた。そばには優美な姿のマカルーも見えた。これらの山々が飛行機と同じ高さに連なって眺められることにまずもって驚いた。やはりヒマラヤは高い！と改めて思った。

思いがけずも日本山岳会の会員にさせていただいたのはネパールでヒマラヤに接した同じ1987年のことである。その年の私学会館で行われた年次晩餐会に出席し、当時の日本山岳会会長でマナスル登頂者でもある今西壽雄氏、副会長の宮下秀樹氏、西堀栄三郎氏、田部井淳子氏をはじめそうそうたる顔ぶれの方々と、私にとって未踏峰の「富士山」のテーブルに一抹の恥ずかしさを覚えながら着いた日を、つい昨日のこのように懐かしく思い出す。小さい頃からおりに触れ書物で読んだり、話に聞いたりした岳人の方々と同じ伝統ある日本山岳会に入会できた喜びはひとしおであった。また、当日は、晩餐会に先立って日本山岳会のルームを訪ね、日本山岳会の資料や膨大な山岳関係図書を目にし、日本山岳会の歴史や伝統の一端に触れることが出来た。

入会以来、今日まで、日本山岳会は、海外・自然保護・科学をはじめ多くの委員会や支部を持ち、私が見聞しただけでも多分野にわたり幅広い活動をされてきていると思う。それらの活動に対して、心から敬意を表したい。翌88年のチョモランマへのネパール・中国・日本の登山隊による三国友好登山は、チョモランマ山頂への登山の様子がテレビで詳細に放映され、臨場感があり、とて

も興奮した。

また、山岳会主催の行事でもいくつも思い出に残るものがある。90年に青山学院大学総研ビルで開催された、自然エネルギーに関するシンポジウムでは、太陽光や風力による発電が山小屋で実用化されている状況にたいへん興味を持った。翌年の山岳環境保護国際シンポジウム東京会議では、エドモンド・ヒラリー卿、モーリス・エルゾーグ、ラインホルト・メスナー、クリス・ボニントン各氏などの海外の著名な登山家の方々とお会いできたことも大きな喜びだった。

また、95年の日本山岳会創立90周年記念フォーラムは、世界最初の自然環境保護運動の地ヨセミテから日本の上高地や北アルプスの自然保護について考えるものであり、当日は、かつてヨセミテを訪れた雅子もご招待いただき、スティーブン・メドレー氏による講演やパネルディスカッションを聴講し、ともに充実した一時を持つことが出来た。

本年、日本山岳会は創立100周年を迎えられた。まずもって、そのことを心からお祝いしたい。

私も先日行われた日本山岳会の創立100周年の晩餐会に出席させていただいたが、厳粛な中にもいつもと変わらない温かさが感じられた。入会時の晩餐会のおりに感じていた緊張感も晩餐会の数を重ねるにつれとれてきたように思うが、今回も着席した「富士山」は依然として未踏峰である。会場では、平山会長はじめ会員の皆さんのお元気な姿に接することができ、とてもうれしかった。隣の席には、アメリカ山岳会のマーク・リッチー会長夫妻が座られ、アメリカの山岳会のお話などもうかがえた。晩餐会のスピーチでは、日本山岳会が、平均年齢が64歳という高齢化を迎えているという話があったが、アメリカ山岳会の平均年齢はリッチー会長によれば私と同じ45歳であるらしい。山の魅力が、より多くの若い人々にも理解されることを望んでやまない。

本文の結びにあたり、入会以来今日まで、日本山岳会の多くの方々から寄せられている数々のご厚情に対して心から感謝申し上げたい。それとともに物故された方々のご冥福もお祈りしたい。入会にあたりたいへんお世話になった今西壽雄氏、アンナプルナ、立山、劔岳の話などをうかがった藤平正夫氏、年次晩餐会のおりにはよく同じテーブルで、昔の登山の話などをされていた望月達夫氏、奥多摩の三頭山に同行して下さった佐藤正倫氏、ヒマラヤ登山について目を輝かせて話しておられた大西宏氏など、思い出は尽きない。

武田久吉・小島烏水氏らによる日本山岳会設立の主旨書には、無限の広がり秘めた山に対する旺盛な探求心と崇高な理念が漂っているように思う。日本

山岳会が次の100年に向けてさらなる発展をとげられることを祈念して筆をおく。